

## 中国人留学生と日本人大学生の生きがい感の比較

柴原 直樹・遠藤 正雄・石井 恒生

### Comparison of Feelings of Worth-living between College Students from China and Japanese College Students

Naoki SHIBAHARA, Masao ENDO and Hisao ISHII

#### Abstract

The purpose of this research was to investigate differences in the feelings of worth-living between college students from China and Japanese college students. In total, 75 Chinese and 75 Japanese participated in the research, where the worth living feeling was measured by the scale composed of 31 questionnaire items created by Kondo (2007). The results showed that Chinese students got a higher score on the scale for the feeling of worth-living than Japanese students, and that there were differences in the levels of four factors consisting of the worth living feeling, such as 'existence value', 'complacency', 'willingness', and 'hedonism' between Chinese and Japanese students.

Key words : feeling of worth living, college students, cross-culture  
生きがい感、大学生、異文化

#### はじめに

青年期はアイデンティティの確立期といわれ、この時期に他者の目に映る自己を意識し、自らの存在価値を問い、生きる意味について考え始める。まさに、青年期は自分自身についての探求と再検討によって自己の発見に導かれる時期なのである(梶田, 1988)<sup>1)</sup>。かつて、キルケゴールは「生きるということの意味、存在するということの意味」を問い、「自分がそのために生き、そのために死ぬことができるような真実」を求めて生涯自分自身と闘い続けたが(工藤, 1966<sup>2)</sup> 参照)、この意味において青年の自己意識は実存主義的な思想を内在しているといえよう。

ところで、我々人間に、生きている意味があり、生きている必要があるという存在理由を感じさせるものに生きがい感がある(落合・伊藤・齊藤, 2002<sup>3)</sup>)。生きがい感は、神谷(1980)<sup>4)</sup>に代表されるように、その多くが社会的価値の認識を含んでいることを前提に議論されることが多い。つまり、生理的な快楽(酒や煙草など)や反道徳的な欲求の充足(パチンコ・競馬といったギャンブルなど)による満足感は、生きがい感とは無関係とする立場である。しかし、近藤(2007<sup>5)</sup>, 2011<sup>6)</sup>)は、生きがい感の主観であり必ずしも社会的価値に適合する必要はないと主張し、生きがい感を「自らの存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲をもつ過程で感じ

1) 近畿医療福祉大学(Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

られるものであるが、同時に人生を楽しむ場合にも感じられるもの」として定義づけている。

本研究の目的は、近藤（2007）<sup>5)</sup> が指摘した生きがい感の4因子（存在価値・現状満足・意欲・人生享楽）について、青年期にある日本人大学生と中国人留学生の間で比較検討することである。独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の発表によると、平成22年度の外国人留学生数は141,774人と過去最高であり、中でも中国人留学生数が86,173人と最も多く在日留学生の約6割を占めている。留学することは、新たな言語、社会制度や慣習の習得、並びに対人関係の形成を通して異文化に触れることを必要とし、自己の文化を超えて大きく成長する機会を与える（佐野, 1992<sup>7)</sup>）。その中で、かくあると自ら認めている「現実自己」は、かくありたいと希求する「理想自己」へと近づいていく。福長・田頭（2004）<sup>8)</sup> が指摘したように、現実自己と理想自己の差異が小さいほど生きがい感は高くなると仮定するならば、中国人留学生の生きがい感は相対的に高いことが予想される。

他方、少子化の影響による大学全入時代といわれる日本にあって、高校卒業後に大学等へ進学する若者の比率はすでに5割を超え高学歴化の傾向にあるが、彼らの学力やコミュニケーション能力は低下の傾向にあるといわれている。友人関係においても、かつてのような内面を開示し合い、人格的共鳴や同一視をもたらすような親密で有意義な「内面的友人関係」（西平, 1990<sup>9)</sup>）ではなく、お互いに傷つけ合わないよう表面的に円滑な関係を志向する傾向が報告されている（岡田, 2010<sup>10)</sup>）。このような友人関係を取る青年においては自己概念の統合状態が損なわれ、情緒的・行動的な面で不適応的な傾向が見出されている（岡田, 2010<sup>10)</sup>）。Rogers（1951）

<sup>11)</sup> が指摘したように、現実自己と理想自己の差異は適応と負の相関関係にあるなら、現代の日本人大学生の生きがい感は中国人留学生に比べて低いことが予想される。本研究は、この点を生きがい感の4因子との関係から検証することを目的とする。

## 方法

**対象者** N大学およびK大学に在籍中の中国人留学生75名（男性35名、女性40名）と留学経験のないK大学の日本人大学生75名（男性31名、女性44名）を対象とした。平均年齢は前者が23.6歳、後者が21.7歳であった。

**調査用紙** 生きがい感の測定には、近藤（2007）<sup>5)</sup> が作成した「青年期の生きがい感スケール」を利用した。このスケールは4因子31質問項目から成り、そのうち11項目が「存在価値」、5項目が「現状満足」、9項目が「意欲」、6項目が「人生享楽」因子に関するものである。これらの質問項目に対し、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法による回答を求め、それぞれの回答に対して、3点、2点、1点を割り当て得点化した。したがって、生きがい感得点は93点～31点の範囲で分布し、得点が高くなるほど生きがい感も高くなる。

**調査時期と調査方法** 授業時間を利用し、中国人留学生に対しては2010年11月に、日本人大学生に対しては5月から6月にわたり実施した。大学生に調査用紙を配布した後、回答方法を説明し、各項目について回答を求めた。調査用紙ならびに回答用紙は、調査終了後にその場で回収した。

## 結果と考察

4 因子をすべて含めた生きがい感の平均得点は中国人留学生が70.1 (SD=10.83)、日本人大学生が65.2 (SD=10.76) で中国人留学生の方が高かったが、近藤 (2007)<sup>5)</sup> による生きがい感の判定基準では、両者とも「ふつう」(74~64) の範囲内にあることが分かる (表 1 参照)。

また、表 2 の日本人大学生および中国人留学生のそれぞれの因子における平均得点を見ると、「存在価値」、「意欲」、「人生享楽」因子に関しては中国人留学生の方が高いが、「現状満足」因子では逆に日本人大学生の方が高くなっている。

そこで、日本人大学生および中国人留学生に対する 4 因子の影響を詳しく調べるために、2 (大学生：中国人・日本人) × 4 (因子：存在価値・現状満足・意欲・人生享楽) の分散分析を行った。ただし、生きがい感スケールにおける各因子に割り当てられた項目数が異なるため、それぞれの因子での平均得点を分析の対象とした。その結果、大学生 ( $F(1, 148) = 4.661, p < .05$ ) と因子 ( $F(3, 444) = 5.286, p < .01$ ) に主効果が見られた。また、交互作用 ( $F(3, 444) = 10.361, p < .01$ ) も有

意であった。それぞれの主効果から、生きがい感は日本人大学生より中国人留学生の方が高いこと、4 つの因子は生きがい感に同等のレベルで影響しているわけではないことが分かった。また、交互作用が有意であったことから、生きがい感における各因子の影響が中国人留学生と日本人大学生の間で異なることも示された。つまり、日本人大学生には因子間において有意な差はないが ( $F(3, 222) = 1.876, p = .13$ )、中国人留学生の場合には有意差がある ( $F(3, 222) = 15.931, p < .01$ )。特に、中国人留学生の場合、「現状満足」因子が「人生享楽」、「存在価値」および「意欲」因子と比べて有意に得点が低かった (Scheffe',  $p < .05$ )。さらに、図 1 に示したように「現状満足」因子では日本人大学生と中国人留学生の間に有意な差はないが、「人生享楽」および「存在価値」因子では中国人留学生の方が高く、「意欲」因子においても同等の有意傾向がみられた。

日本人大学生および中国人留学生において 4 因子間の相関を取ってみると、両者に違いが見られた。日本人大学生の場合、「人生享楽」因子は「現状満足」、「存在価値」および「意欲」因子と相関はないが、「現状満足」、「存在価値」、「意欲」因子間には高い相関があった (表

表 1. 日本人大学生と中国人留学生における 4 因子の平均得点と標準偏差 (SD)

	存在価値 (11項目) 得点範囲11~33	現状満足 (5項目) 得点範囲5~15	意欲 (9項目) 得点範囲9~27	人生享楽 (6項目) 得点範囲6~18
日本人大学生	22.6 (4.47)	10.7 (2.64)	19.5 (4.27)	12.4 (2.64)
中国人留学生	25.7 (4.15)	10.1 (2.55)	20.7 (4.01)	13.6 (2.69)

表 2. 近藤 (2007)<sup>5)</sup> による生きがい感の判定基準

点数	93~81	80~75	74~64	63~58	57~31
評価	大変高い	高いほう	ふつう	低いほう	大変低い

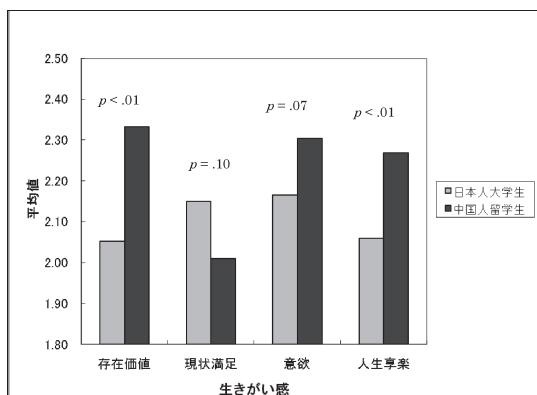


図1 日本人大学生と中国人留学生における4因子の平均値 (3参照)。他方、中国人留学生では、これら4因子間のすべてにおいて高い相関がみられた(表4参照)。この結果は、日本人大学生では「人生享楽」因子が他の3因子から独立した位置にあることを示している。この点は、日本人大学生を対象にした近藤(2007)<sup>5)</sup>の

調査結果と類似している。

日本人大学生と中国人留学生の生きがい感の相違をさらに詳しく調べるために、4因子31項目のすべてについてt検定を行った。表5に日本人大学生と中国人留学生の平均値およびt値を示す。「存在価値」では11項目中7項目で、「意欲」では9項目中3項目で中国人留学生の方が日本人大学生よりも平均値が有意に高くなっている。他方、「現状満足」に関しては5項目中2項目で日本人大学生の方が、1項目で中国人留学生の方が高く、「人生享楽」の場合は6項目中1項目で日本人大学生の方が、2項目で中国人留学生の方が高いという結果を得た。

因子ごとの各項目の得点は、3が「はい」、2が「どちらでもない」、1が「いいえ」と

表3. 日本人大学生における生きがい感4因子の相関

	1. 存在価値	2. 現状満足	3. 意欲	4. 人生享楽
1. 存在価値	1.000	.480**	.682**	.174
2. 現状満足		1.000	.439**	.254*
3. 意欲			1.000	.193
4. 人生享楽				1.000

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表4. 中国人留学生における生きがい感4因子の相関

	1. 存在価値	2. 現状満足	3. 意欲	4. 人生享楽
1. 存在価値	1.000	.371**	.709**	.528**
2. 現状満足		1.000	.431**	.377**
3. 意欲			1.000	.607**
4. 人生享楽				1.000

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

中国人留学生と日本人大学生の生きがい感の比較

いう3件法によって産出されたため、2.0よりも高くなるにつれてその項目に対する回答がより肯定的なものに、2.0よりも低くなるにしたがってより否定的なものになっていく

(表5参照)。この点に着目し、因子ごとに日本人大学生と中国人留学生の生きがい感がどのような傾向にあるか分析していくと以下のようなようになった。

表5. 4因子31項目の日本人大学生および中国人留学生の平均値とtの値

	日本	中国	tの値
1. 存在価値			
私は他人から信頼され頼りにされています	1.87	<u>2.36</u>	4.333**
私の行為で人に喜んでもらえることがよくあります	2.12	<u>2.39</u>	2.254*
自分が必要とされ存在価値を感じるがあります	2.12	<u>2.57</u>	3.770**
皆で力を合わせて目的を達成することがよくあります	1.95	<u>2.24</u>	2.310*
人のために役に立ったと感じることがあります	2.35	2.37	0.216
自分は高く評価されたと思えることがよくあります	1.47	<u>2.03</u>	4.830**
私は課せられた役割をよく果たしています	2.16	2.08	0.660
私は人間的に成長したと感じることがあります	2.17	<u>2.76</u>	5.136**
私は周囲から認められています	1.89	<u>2.24</u>	2.909**
私は今まで知らなかった新しい自分を発見することがあります	2.03	2.12	0.682
努力した結果、報われたと感じることがあります	2.45	2.49	0.330
2. 現状満足			
私は今の生活に満足感があります	2.19	1.65	4.134**
毎日が平和で楽しいと感じています	2.36	2.20	1.306
私は今幸せを感じています	2.41	2.11	2.292*
私の毎日は充実していると思います	2.25	2.05	1.475
全てのものが順調に進んでいると思っています	1.53	<u>2.04</u>	4.180**
3. 意欲			
私は将来に希望を持っています	2.17	<u>2.59</u>	3.466**
自分の人生に大きな期待を持っています	2.00	<u>2.55</u>	4.537**
私はものごとにやる気を持っています	2.13	<u>2.43</u>	2.458*
私には目的があり、達成したいことがあります	2.67	2.64	0.257
私は何事にたいしても積極的に取り組んでいこうと思っています	2.35	2.20	1.185
今やりがいのあることをしています	1.99	2.13	1.025
夢中になって好きなことをしていることがよくあります	2.28	2.31	0.198
私は現在自分の能力を精一杯発揮しています	1.63	1.87	1.926
自分の趣味や好きなことに出会えることがよくあります	2.28	2.03	1.824
4. 人生享楽			
暖かい日差しの中でよく昼寝を楽しみます	1.75	<u>2.29</u>	3.924**
私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでます	2.60	2.59	0.111
私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよくもっています	2.68	2.35	2.721**
私は心ゆくまで買い物をするがあります	1.99	2.15	1.105
世界がバラ色に輝いてみえることがあります	1.32	<u>1.97</u>	5.573**
今日は一日好きなことができると思う日がよくあります	2.03	2.27	1.732

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

### 1. 「存在価値」の項目

日本人大学生の場合、努力が実を結びそれが人の役に立ったと思っても、周囲の人から高い評価や信頼を得られず、認められていないと感じている。これに対して、中国人留学生は自ら努力したことで人間的に成長し、他人から必要とされる価値ある存在として自分自身が認められていると感じている。

### 2. 「現状満足」の項目

日本人大学生にとって毎日の生活は平和で充実し、満足や幸せを感じさせるものの、彼らは必ずしも物事が順調に進んでいるとは思っていない。他方、中国人留学生は平和で充実した日々を過ごし、物事が順調に進んでいると感ずるが、今のままの生活には満足感をおぼえない。

### 3. 「意欲」の項目

日本人大学生は、達成したい目標があり、それに向かって積極的に取り組んでいるが、自分の能力を精一杯発揮することはなかなかできないと感じている。中国人留学生は、目的を達成しようと意欲的であるが、今はまだ自分の能力を十分発揮しきれていない。しかし、自分の将来に希望を持ち自分の人生に大きな期待を寄せている。

### 4. 「人生享楽」の項目

日本人大学生は十分睡眠を取り、おいしいものを食べたり飲んだりしているが、世界がバラ色に輝いて見えるほどの人生を楽しんでいない。しかし、中国人留学生は買い物を楽しんだり、日本人ほどではないにしても好きなものを飲み食いしたり、また昼寝を楽しむなど、自分の好きなことをしていると思っている。

以上、日本人大学生と中国人留学生の生きがい感の違いについて検討してきたが、今回の調査結果から以下のことがわかった。

1. 生きがい感は中国人留学生の方が日本人大学生よりも高かった。
2. 生きがい感の4因子のうち、「存在価値」と「人生享楽」で中国人留学生の方が高く、「意欲」においても同様の傾向がみられた。しかし、「現状満足」では両者の間に差はなかった。
3. 日本人大学生の場合は生きがい感の4因子は同じレベルにあったが、中国人留学生では「現状満足」因子が他の3因子に比べて低いレベルにあった。
4. 中国人留学生の場合、生きがい感の4因子の間ですべて有意な相関がみられたが、日本人大学生では「人生享楽」因子のみ他の3因子との間に相関はみられなかった。

留学するという事は、自国の文化を超えて多くを学ぶとともに留学生活を楽しみ、現状に満足せず異文化交流を通して新たな自己を発見し自らの存在価値を高めたいという要求を生み出し、意欲的になる。このことが中国人留学生における生きがい感の得点パターンに現れているものと思われる。他方、日本人大学生の生きがい感の得点パターンから、彼らは比較的現状に満足しているため、自己の存在価値を高め「理想自己」に近づこうとする意欲に欠ける傾向が見られる。また、それなりに楽しい生活を送っているものの、その楽しさの中に価値や意欲、満足といったものを見出すことは少ない。

人間は現在という時制のなかにしか存在しない。生きがい感も同様、現在という時制のなかで経験するものであるが、近藤(2007)<sup>5)</sup>は生きがい感を過去にこだわら

## ま と め

ず、将来を含めた自分の生き方や生活に対する積極的、主体的な意識と捉え、主に現在から未来へ向けての心の姿勢と解釈している。人間は出来上がった不動の存在ではなく、つねに生成変化していくものであり、生きがい感もそれに合わせて変わっていくものなのである。日本人大学生の生きがい感が高まることを期待したい。

### 参考文献

1. 梶田叡一：自己意識の心理学（第2版）．東京大学出版会，1988
2. 工藤綏夫：キルケゴール．清水書院，1966
3. 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一：青年の心理学（改訂版）．有斐閣，2002
4. 神谷美恵子：生きがいについて．みすず書房，1980
5. 近藤勉：生きがいを測る．ナカニシヤ出版，2007
6. 近藤勉：生きがい感を測る．生きがい研究，17，4-20，2011
7. 佐野秀樹：留学生のカウンセリング．現代のエスプリ294，71-80，1992
8. 福長晋也・田頭穂積：大学生における理想自己と現実自己の差異の検討－生きがい感との関連から．心理教育相談センター年報，12，75-81，2004
9. 西平直喜：成人になること．東京大学出版会，1990
10. 岡田努：青年期の友人関係と自己．世界思想社，2010
11. Rogers, C.R.: Client-centered therapy. Its current practice, implications and theory. Boston: Houghton Mifflin, 1951